

日本語の授与動詞構文の構文パターンの類型化

—他言語との比較対照と合わせて—

澤 田 淳

青山学院大学

【要旨】 一般に、日本語の本動詞型 (A 型)、補助動詞型 (B 型) の授与動詞構文は、それぞれ、物の授受、事態の授受を表すとされることが多い。本稿では、事態の授受を表すとされる日本語の補助動詞型の授与動詞構文 (「てくれる／てやる」構文) が4つの構文パターン (B1 α 型, B1 β 型, B2 型, B3 型) に分類できることを示す。さらに、日本語の授与動詞構文の構文パターンの分類をもとに、幾つかのアジアの諸言語 (韓国語, マラーティー語, 中国語) の授与動詞構文 (「V + 授与動詞」構文) との比較対照を試みる。最後に、これらの言語との対照研究から得られるインプリケーションとして、授与動詞の構文パターンの範囲に関する通言語的な含意階層 (A 型 < B1 α 型 < B1 β 型 < B2 型 < B3 型) が提出できることを論じる*。

キーワード: 授与動詞構文, 構文パターン, 言語対照, 文法化, 含意階層

1. はじめに

日本語の授与動詞構文¹は、実際の運用においては多様な文の中で出現するが、明確な分類基準に基づいて分析してみると、限られた数の構文パターンに収斂する。本稿では、一定の枠組みに従って、日本語の授与動詞構文の構文パターンを分類すると共に、そこでの分類をもとに、幾つかのアジアの諸言語 (韓国語, マラーティー語, 中国語) の授与動詞 (GIVE 動詞) 構文との比較対照を試みる。さらに、

* 本論文は、日本認知言語学会第5回大会 (2004年9月19日, 於: 関西大学), 日本語文法学会第7回大会 (2006年10月29日, 於: 神戸大学), The 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference (2012年10月13日, 於: 国立国語研究所) での発表, および、日本認知言語学会のプロシーディングズ論文 (澤田淳 2005) がもととなっている。本論文を改訂するにあたり、『言語研究』の二名の査読者, 並びに、『言語研究』編集委員会から、有益で建設的なコメントを数多く頂いた。浅尾仁彦, 劉轟の各氏からは草稿の内容およびデータに対して貴重なご助言を頂いた。ブラシャント・バルデシ氏からは、マラーティー語の貴重なデータをご提供頂いた。本調査のインフォーマントの方々からは、データ面における有益なフィードバックを頂いた。これら全ての方々には深く感謝申し上げる次第である。いうまでもなく、本稿における不備の責任は全て筆者にある。

¹ 本稿では、本動詞「くれる」「やる (あげる)」, および、補助動詞「てくれる」「てやる (てあげる)」を後項とする「V + てくれる／てやる (てあげる)」 (= V + 授与動詞) を含む構文を総称して授与動詞構文と呼ぶ。「(て) あげる」は、近年、謙讓語性を失い、「(て) やる」の美化語へと移行している (文化庁文化審議会国語分科会 2007: 9)。本稿では、「(て) あげる」のデータも扱うが、表記上の煩雑さを避けるため、表記は「(て) やる」で代表させる。尊敬語形式「(て) くださる」や謙讓語形式「(て) さしあげる」は、直接の考察対象とはしないが、これらの敬語形の授与動詞構文にも、基本的に並行した構文分析が可能である。

対照研究から得られるインプリケーションとして、授与動詞の構文パターンに関する通言語的な含意階層 (implicational hierarchy) が提出できることを論じる。

日本語の授与動詞構文を諸言語との比較対照から相対化したパイオニア的研究に Shibatani (1996) がある。Shibatani (1996) は、(i) 主動詞に授与動詞を後接させた与格項を含む構文 (日本語など)、(ii) 動詞に受益の接辞形式を後接させた与格項を含む構文 (インドネシア語など)、(iii) 二重目的語構文 (英語など) を、「受益者格構文」(benefactive constructions) と総称している。Shibatani のいう受益者格構文とは、「受益者 (beneficiary) が与格項として統語的に符号化された構文」と定義されるものである (Shibatani 1996: 159)。日本語と英語でいえば、(1a), (2a) ではなく、(1b), (2b) の受益構文を指す。

- (1) a. 僕は花子のために本を買ってやった。
 b. 僕は花子に本を買ってやった。
- (2) a. John bought a book for Mary.
 b. John bought Mary a book. (Shibatani 1996: 160)

Shibatani の研究では、人が授与の状況を認知する際の鋳型としての「GIVE スキーマ」が仮定され、表される状況が GIVE スキーマに適合しているとみなしやすい (つまり、表される状況から物の授与が認識されやすい) 事例ほど、受益者格構文として適格となるとされる。どこまでの範囲の事例を GIVE スキーマへの適合例とみなすかは当該言語の慣習に拠る部分もあり、言語間の相違となって現れる²。

² GIVE スキーマは、以下のように定式化されるものである。

- (i) *The 'give' schema*
 Structure: [NP₁ NP₂ NP₃_{GIVE}]
 NP₁ = coded as a subject
 NP₂ = coded either as a primary object or as a dative indirect object
 NP₃ = coded either as a secondary object or as a direct object
 Semantics: NP₁ CAUSES NP₂ TO HAVE NP₃; i.e.
 NP₁ = human agent, NP₂ = human goal, NP₃ = object theme
 NP₂ exercises potential possessive control over NP₃
 NP₁ creates the possessive situation on behalf of NP₂
 (Shibatani 1994: 45, 1996: 173, 2000: 323)

以下の日本語の事例から、GIVE スキーマに合致しやすい、言い換えれば、物の授与が認識されやすい事例ほど、受益者格構文が使われやすくなるという興味深い事実が読み取れる。

- (ii) a. 僕は花子に本を買ってやった。
 b. 僕は花子に戸を開けてやった。
 c. 僕は花子に布団を敷いてやった。
 d. ?僕は花子に窓を開けてやった。
 e. ?僕は花子に布団を上げてやった。
 f. *僕は花子に窓を磨いてやった。
 g. *僕は花子に戸を閉めてやった。
 h. *僕は花子にゴミを捨ててやった。
 i. *僕は花子に市場に行ってやった。
 (Shibatani 1994: 43)

言語間の類似点と相違点を見通しよく整理するためには、比較対照の指針となる仮説としての枠組みが必要となる。Shibatani の研究は、様々な言語の受益者格構文を比較対照するための指針となる枠組みを提供している点において重要な意義を有するものである。本稿では、部分的に重なり合いつつも、Shibatani とはやや異なった観点から、授与動詞を「V + 授与動詞」の形で使う言語を対象に、それらの言語の授与動詞構文を統一的な観点から比較対照するための枠組みを提案してみたい。これまで着目されてこなかった構文パターンの類型化という視点から言語間の授与動詞構文を比較対照する点が、本稿の分析法の特色となっている。

2. 日本語の授与動詞構文の構造と意味

2.1. 日本語の授与動詞構文の構文パターン

日本語の授与動詞は、求心的か非求心的かという直示的方向性の違いに応じた「くれる」と「やる」の2系列の語彙を備えており、それらはテ形複雑述語（「V てくれる／てやる」）の後項である補助動詞「てくれる／てやる」へと文法化を遂げている。一般に、日本語の本動詞型、補助動詞型の授与動詞構文は、それぞれ、物の授受、事態の授受を表すとされることが多い。しかし、事態の授受を表すとされる補助動詞型の授与動詞構文には、異なる統語構造をなす複数の構文型が含まれていることが、次のようなデータから示唆される。

- (3) 太郎が花子にお年玉をくれた／やった。
- (4) a. 太郎が花子に花を贈ってくれた／てやった。
b. 太郎が花子に花を摘んでくれた／でやった。
- (5) 太郎が花子を褒めてくれた／てやった。
- (6) 雨が降ってくれた／*てやった。

本稿では、日本語の授与動詞構文は、次の(7)のいずれかの構文型に分類できることを主張する。A型は本動詞型、B型は補助動詞型を表す。B型の内側の角括弧は「てくれる／てやる」の補部 (complement) を構成する要素を表す³。「…」は、動詞Vが取り得る種々の格成分を表す。B3型の(Xガ)は、この構文型では主語名詞句を持たない事象があり得ることを示す。「*」は、B3型には「てやる」がないことを示す。B1型は、Shibatani のいう受益者格構文に相当する。本稿では、B1型を前項動詞のクラスによってB1 α 型とB1 β 型に下位分類する。B1 α 型では前項動詞も与格名詞句を項に取るのに対して、B1 β 型では前項動詞は与格名詞句を項に

本稿では、さらに、具体的にどのようなクラスの動詞が受益者格構文に適合しやすいのかといった問題や、「僕は花子に本をプレゼントしてやった」のように、前項動詞自体が与格名詞句を項に取れるタイプと、(ii)のような前項動詞自体は与格名詞句を項に取れないタイプとの間の共通点と相違点についても考察を深めたい。以上の点については、2.3節で詳述する。

³ B1型とB2型の補部に動詞句(VP)ではなく、補文(埋め込み文)を仮定する分析も可能であろうが、補部にどちらを仮定したとしても、本稿の本質的な議論には影響しない。

取らないという違いがあるが、両者の基本的構造は同じである (B1α 型の場合, (7b) の「…」の位置に、授与動詞の項「Yニ」と同一指示の与格名詞句が存在する)。

- (7) a. A 型: Xガ Yニ Zヲ クレル/ヤル
 b. B1 型: [Xガ Yニ […Zヲ V] テクレル/テヤル]
 c. B2 型: [Xガ [… V] テクレル/テヤル]
 d. B3 型: [[(Xガ) …V] テクレル/*テヤル]

上の (3) – (6) のデータは、それぞれ、次の (8) – (11) の構造をなすと分析される。(9a) の「花子に」の下に付された「*i*」は、同一指示を示す標識である。

- (8) 太郎が花子にお年玉をくれた/やった (A 型)
 (9) a. [太郎が 花子に_i [花子に_i花を贈っ] てくれた/てやった] (B1α 型)
 b. [太郎が 花子に [花を摘ん] でくれた/でやった] (B1β 型)
 (10) [太郎が [花子を褒め] てくれた/てやった] (B2 型)
 (11) [[雨が降っ] てくれた/*てやった] (B3 型)

管見の限り、日本語の補助動詞型の授与動詞構文が、統語構造上、(7) に示すような複数の構文パターンに分類されることを明示的に指摘した (あるいは、論証した) 研究はない。しかし、このような構文パターンの類型化によって、日本語の授与動詞構文の構造体系が明らかになると同時に、他の言語の授与動詞構文 (「V + 授与動詞」) との対照研究を行う際の指針ともなることが期待される⁴。

2.2. B 型の構文型の分類基準

A 型の授与動詞「くれる」「やる」は、授与者 (主語名詞句) が受領者に物を「与える」という 3 項関係からなる恩恵的な授与行為を表す。A 型の授与動詞からは、「物の授与性」、「主語名詞句の恩恵を施す意図」、「3 項関係」といった特性が抽出されるが、このような特性が B 型の「てくれる」「てやる」に一律に引き継がれているわけではない。これらの特性の引き継がれ方には違いがあり、このことが B1 型 (B1α 型 / B1β 型)、B2 型、B3 型の統語構造の違いとなって現れる。B1α 型、B1β 型、B2 型、B3 型の違いは、次の I から IV の基準と照合した分析によって論証できる (基準 I, II, IV は、A 型から抽出される上記の特性を基に設定した基準である)⁵。

⁴ 益岡 (1991: 10) は、一般に、対照研究において、「言語の構造の分析を深めていくには、分析に有利な構造を備えた言語を対象に分析し、次にその成果を他の言語に及ぼしていくのが有効である」とする。本稿も、方法論的にこのような対照研究の視点を持つ。他の言語の授与動詞構文 (V + 授与動詞) の構文型を分析する際には、「V + 授与動詞」の構文型が高度に区分化された日本語の授与動詞構文をベースとした対照研究が極めて有効となるのである。

⁵ さらに多くの基準を立てることもできるが、B 型の構文型の違いはこれら最小限の基準から論証可能である。本稿では、議論の簡潔さを図るために、あえてこれら 4 つの基準に絞り込んでいる。また、これらの基準は排他的なものではなく、相互の関連性を有するものである。

表1 B型の構文型の分類基準

基準 I	物の授与性
基準 II	主語名詞句の恩恵を施す意図
基準 III	前項動詞のクラス
基準 IV	授与動詞が取る項の数

基準 I は、「てくれる／てやる」が物の授与性を有するか否かという基準である。基準 II は、主語名詞句に恩恵を施す意図がある（と話し手がみなしている）か否かという基準である。基準 III は、「てくれる／てやる」に如何なるクラスの動詞が前接するののかという基準である。基準 IV は、「てくれる／てやる」が取る項の数は幾つかという基準である（前項動詞 V が取る項の数ではない点に留意されたい）。以下、これらの基準と照合させながら、B1 α 型、B1 β 型、B2型、B3型における構造と意味の違いを示す。

2.3. B1型

B1型は、与格名詞句（受け手（recipient））への物の移動の意味が（事例によって、具体・抽象の差はあるが）認められるタイプの構文である。B1型は、さらに、前項動詞の意味クラスによって、次のB1 α 型とB1 β 型の2種に下位区分できる。

- (12) a. B1 α 型：前項の動詞句に物の授与・移動の意味が含まれるタイプ。与格名詞句は、前項動詞と後項の授与動詞の共有項として機能する。
 b. B1 β 型：前項の動詞句には物の授与・移動の意味が含まれないタイプ。与格名詞句は、後項の授与動詞の項としてのみ機能する。

たとえば、「(年賀状を)書く」は物の移動を含む3項動詞として使えるが、その場合の授与動詞構文はB1 α 型である（「(年賀状を)書く」が2項動詞（作成動詞）として使われた場合は、B1 β 型である）。同じ「書く」でも、「(推薦状を)書く」は、常に物の移動を含まない2項動詞となるため、授与動詞構文はB1 β 型となる（本稿では、前項動詞の結合価の認定にあたって、池原ほか編 1999 を参考にした）。

- (13) a. 太郎は花子に年賀状を書いてやった。(B1 α 型 (／ B1 β 型))
 (cf. 太郎は花子に年賀状を書いた)
 b. 太郎は花子に推薦状を書いてやった。(B1 β 型)
 (cf. ? 太郎は花子に推薦状を書いた)

以下、B1 α 型、B1 β 型の順に、それらの意味的・統語的特徴を見ていくことにする。

2.3.1. B1 α 型

以下は、B1 α 型の「てくれる」「てやる」の例である。

- (14) 寿司桶職人の経験がある義父は、83歳の時ふた付きの立派な寿司桶を私にプレゼントしてくれた。
 (『朝日新聞』2012年1月8日、朝刊)

- (15) そんな私は、残したパンを、よく学校にいたハトに投げてやっていた。
 (『朝日新聞 2010年5月1日, 朝刊])
- (16) 「外人が喜びそうな絵なので、アメリカの知り合いに2000万円で売ってあげる」
 (『朝日新聞』1985年5月13日, 夕刊)

B1α型に生起する動詞は、(i)「渡す」「プレゼントする」「贈る」などの「所有変化動詞」(change of possession verbs), (ii)「送る」「投げる」「届ける」などの「位置変化動詞」(change of location verbs), (iii)「売る」「貸す」「払う」などの「所有・位置変化動詞」(change of possession and location verbs)である(これら3つの動詞タイプの違いの詳細については、Kishimoto 2001を参照)。これらB1α型に生起する動詞は、「てやる／てくれる」の支えなしでも、与格名詞句が生起可能な3項動詞であり、この点がB1β型に生起する動詞との重要な違いとなる。

B1α型で問題となるのは、与格名詞句(Y二)の位置づけである。本稿では、B1α型に生起する与格名詞句は、前項の動詞と後項の授与動詞の両方に共有される項であるとみなす。そのようにみなす根拠の1つとして、B1α型に生起する与格名詞句は、前項動詞のみならず、後項の授与動詞との間にも意味的な選択制限を有するという点がある。この点を、次の位置変化動詞「送る」を例に考えてみよう。

- (17) a. 私は |太郎に／ボストンに| 荷物を送った。
 b. 私は |太郎に／*ボストンに| 荷物を送ってやった。 (B1α型)

a文の二格名詞句は、動詞「送る」の項(着点(goal))として機能している。着点は、物の移動先を表すが、物の移動先は人でも場所でもよい。一方、b文の二格名詞句は、「送る」の項(着点)であると同時に、「てやる」の項(受け手)でもある。その証拠に、受け手となり得る「太郎」(人)は適格となるが、(場所を人格的に捉える特殊なメトニミー的解釈を除いて)受け手とはなり得ない「ボストン」(場所)は不適格となる。B1α型に生起する与格名詞句は、次に示すような前項の動詞と後項の授与動詞の「共有項」として機能するといえるのである。

- (18) B1α型: Xガ Y二 Zヲ V テクレル／テヤル
-
- 共有項

すなわち、B1α型の「てやる／てくれる」の与格名詞句は、本動詞「やる／くれる」の与格名詞句の意味特徴(意味役割=受け手)を引き継いでいるのである。

(17b)は、次のように、「花子のために」や「花子の代わりに」などの形で、別の参加者を受益者として想定すれば、「ボストンに」の場合でも適格となる。

- (19) 私は花子のために |太郎に／ボストンに| 荷物を送ってやった。

ここで重要なことは、(19)の「太郎に／ボストンに」は、「送る」のみの項であ

り、「てやる」との共有項ではないという点である（「ポストンに」が適格となるのはそのためである）。ここでの「てやる」は、B1 α 型ではなく、B2型であり、物の授与性を表さず、単に花子に対して恩恵性を付与しているに過ぎない。

合わせて強調しておきたいのは、同一の動詞が複数の構文型にまたがって現れる場合があるという点である。その場合、（二格名詞句の統語的な位置づけなど）構造的な分析によって、問題の文がどの構文型にあるのかを見極めなければならない。

以下、2.2節で提示した基準をもとに、B1 α 型の特徴をさらに詳しく見ていこう。

第1に、基準Iの観点によれば、B1 α 型は、物の授与的意味を有するといえる。ただし、B1 α 型がA型と全く同じ程度の物の授与性を有するとはいえない。A型と異なり、B1 α 型では、授与物是对格名詞句で示された対象物であるとは限らない。次の例では、太郎の家ではなく、太郎の家の位置情報が花子に渡っている。

(20) 太郎は花子に自分の家を教えてやった。(B1 α 型)

(cf. 太郎は花子に自分の家をやった。(A型))

第2に、基準IIの観点によれば、主語名詞句は恩恵を施す意図を有する。この意味で、B1 α 型の主語名詞句は有生物に制限される。

第3に、基準IIIの観点によれば、B1 α 型における前項動詞の意味クラスは、上で示したような「物の授与・移動」を表す動詞である。これらの動詞は、後項の授与動詞が表す授与行為と同時的な関係をなす（この点については、2.6節でも触れる）。

第4に、基準IVの観点によれば、B1 α 型において、「てくれる／てやる」が取る項の数は、「Xガ」, 「Yニ」, 「動詞句（YニZヲV）」の3つである。この場合、「てくれる／てやる」の与格名詞句と、前項動詞（V）の与格名詞句は、同一指示対象でなければならないが、また、両者は表層では同時に生起できないという制約（「二重与格制約」）がある（例：「*太郎は花子に花子に本を送ってやった」）。

2.3.2. B1 β 型

以下は、全てB1 β 型の「てくれる」「てやる」の例である。

(21) 編み物教師の義母が、私の母にモヘアのセーターを編んでくれた。

（『朝日新聞』2001年2月27日、朝刊）

(22) この湯飲みは、息子が高校卒業時、担任のT先生がクラス全員に焼いてくれたものだ。

（『朝日新聞』1998年4月12日、朝刊）

(23) 女の子は私に花を摘んでくれた。（『讀賣新聞』1996年6月2日、朝刊）

(24) かつて版画で年賀状を作った経験から彫り出したが、失敗の連続で、印刻用の石もたくさん買う羽目に。（中略）娘と孫2人にも彫ってやった。

（『朝日新聞』2004年7月20日、朝刊）

(25) 白井はこの地の博芳町に地所を買い、娘夫婦に家を建ててやり、五、六軒の家作もつけた。

（松本清張『或る「小倉日記」伝』）

- (26) 「子供の犯罪が増えたのも、親が子どもに本を読んでやったり、話を聞いてやったりしなくなったからでは」 (『朝日新聞』1998年8月30日、朝刊)

これらの例における前項動詞は、与格名詞句を項として要求しない2項動詞である。たとえば、次の例において、「てやる」の支えのない前項動詞による単独形は安定せず、「てやる」の支えによって与格名詞句の生起が安定する。

- (27) 太郎は花子にケーキを {a. (?) 焼いた / b. 焼いてやった}。
 (28) 太郎は花子にご飯を {a. ? 炊いた / b. 炊いてやった}。
 (29) 太郎は花子に花を {a. * 摘んだ / b. 摘んでやった}。
 (30) 太郎は花子に小皿を {a. * とった / b. とってやった}。

(27a), (28a) のような作成動詞単独の例については、容認度の判定に揺れがあることが山田 (2004: 92-93) のアンケート調査で示されているが、容認度の判定に揺れがあるということ自体、作成動詞単独形による与格名詞句生起の不安定さを示しているともいえる⁶。本稿では、上の実例で出現している与格名詞句は、「てくれる / てやる」によって導入された項であるとみなしておきたい。

主動詞ではなく、補助動詞が与格名詞句を項として取る現象は特異な現象ではなく、たとえば、提示動詞「見せる」の補助動詞形「てみせる」などでも認められる。次の例の与格名詞句は、「てみせる」によって導入された項であるといえる (「てみ

⁶ 山田 (2004: 93) は、「作成動詞は、二格目的語を動詞自体が必須的に要求するとははいかないまでも、要求していると認識されやすい性質を持つ」と指摘している。では、「(ケーキを) 焼く」や「(セータを) 編む」などの作成動詞単独の例が、与格名詞句 (二格目的語) を要求していると「認識されやすい」のはなぜであろうか。

作成動詞は、「人に物を与える」という意味を意味論的に「含意」(entail) はしないが、そのような意味を語用論的に「推意」(implicate) させやすい動詞といえる。すなわち、作成行為は、人に与えることを目的としてなされることがあり、そのような知識が私たちの語用論的な知識としてあるといえるのである。さらに、「物の授与」の喚起は、与格名詞句に生起する名詞が「子供」や「恋人」のような場合、より一層強まるように思われる (例: 「子供にケーキを焼く」、「恋人にセータを編む」)。これらの語用論的な要因があいまって、作成動詞単独の例が与格名詞句を要求していると認識されやすくなるのであろう。作成動詞ではないが、獲得動詞の中では「買う」が単独で与格名詞句を生起させやすいが、それに対しても同様の説明が可能である。

このように、「焼く」「編む」「買う」などの動詞は「物の授与」の場面の想起につながりやすいが、これらの動詞の辞書の意味の中に「与える」という意味を含めることはできない。これらの動詞の与格名詞句を受身文の主語にした場合、被害受身文としか解釈できないが、これは、問題の与格名詞句が動詞の項としての間接目的語ではないためである。「プレゼントする」などの項としての間接目的語を内在する動詞では、直接受身文に解釈される点と比較された。

- (i) a. (?) 太郎は花子にケーキを焼いた。
 → 花子は太郎にケーキを焼かれた。 (被害受身文)
 b. 太郎は花子にケーキをプレゼントした。
 → 花子は太郎にケーキをプレゼントされた。 (直接受身文)

与格名詞句の受身化に関する振る舞いについては、さらに、Kishimoto (2001) を参照。

せる」を取り除いた「*子供に実験した」は不自然となる。

- (31) 理科教育に熱心な教員らが出向いて子供に実験してみせたりする「実験教室」
「出前授業」も盛んになってきたが、授業時間の減少で、授業で実験をする
のは難しくなっているようだ。 (『朝日新聞』2004年7月11日, 朝刊)

B1 β 型の「てくれる」「てやる」は、結合価の増加をもたらす点で、Shibatani (1994, 1996, 2000)をはじめ、幾つかの研究でも注目されている(三宅1996, 加賀1997, 山田2004, 澤田淳2007など)。これらの研究の主たる論点は、主に前項動詞(句)の意味クラスに注目しつつ、B1 β 型の授与動詞構文の適格性条件(または、与格名詞句生起の条件)を明らかにする点にある。本節の議論もこのような論点を含むが、本節の論点の中心は、むしろB1 β 型の特徴を他の構文型との比較の中で相対化することにある。以下、2.2節で示した4つの基準に沿って、B1 β 型の授与動詞構文の意味と構造の特徴をさらに詳しく見ていくことにしよう。

第1に、基準Ⅰの観点によれば、B1 β 型は、B1 α 型と同様、物の授与的意味を有するといえる。B1 β 型の「てやる」が単に与格名詞句に対する恩恵の意味を付与しているだけとしたのでは、次の例のa文とb文の適格性の違いが説明できなくなる。

- (32) 太郎は花子に仕事を {a.見つけてやった／b.*休んでやった}。

B1 β 型が物の授与を前提とした構文であると想定すれば、a文と異なり、b文は、「仕事」が花子への授与物とはいえないため、不適格となることが説明できる。

ただし、B1 α 型の場合と同様、B1 β 型も、授与動詞が補助動詞化している分、物の授与性は弱化している。B1 β 型の事例の中にも、対格名詞句で示された対象そのものが授与物とはならない例(「花子に本を読んでやる」(授与物= (声を伴った)本の内容)、「花子にピアノをひいてやる」(授与物=ピアノの音色)など)がある。Shibatani (1996: 180)は、次のような例の授与物として、「通路」といった抽象的な存在を想定している⁷。

- (33) 僕は花子に戸を開けてやった。 (Shibatani 1996: 179)

⁷ Shibataniによれば、次の例は、話し手が「花子」が窓から抜け出すのを手伝うなど、「通路」を作り出すという(やや特殊な)目的の下でのみ適格になるとされ、新鮮な空気を入れるなどのそれ以外の目的の下では不適格になるとされる。

- (i) *?僕は花子に窓を開けてやった。 (Shibatani 1996: 179)
では、次の例はどうであろうか。

- (ii) 力道山の放送のときなんて、窓の外は人ばかり。私がみんなに窓を開けてあげたの。 (『朝日新聞』1995年6月21日, 朝刊)

(ii)での話し手は、みんなを家の中に入れてやるためではなく、みんなが家の中のテレビを見られるように、窓を開けてやったといえる。この例での抽象的な授与物を想定するならば、「(人が出入りする)通路」ではなく、「視界」といったものとなる。ただし、「視界」を「視線の通り道」とみなすならば、Shibataniのいう「通路」に含めて考えることは可能である。

- (34) 体の不自由な人に店のドアを開けてあげるなど, お客さんに配慮した仕事ができている。
(『讀賣新聞』2005年8月2日, 朝刊)

日本語(さらには、韓国語やマラーティー語)では、対格名詞句で示された対象そのものが授与物とはならない事例も B1 β 型の構文型で表せるが、この種の周辺事例が同じ B1 β 型の構文型で表せるかどうかについては、言語によって差異が生じる可能性もある⁸(この点については、3.3 節の中国語「V 給」の議論も参照)。

第2に、基準 II の観点によれば、主語名詞句は恩恵を施す意図を有する。この意味で、B1 β 型の主語名詞句も有生物に制限される。

第3に、基準 III の観点によれば、B1 β 型における前項動詞の意味クラスの範囲には制限がある。三宅(1996)は、次のような興味深い例の比較をもとに、本稿でいう B1 β 型の構文に生起する動詞は、典型的には作成動詞であるとしている(「(ケーキを)焼く」は作成動詞、「(ゴミを)焼く」は対象変化動詞である)。

- (35) 花子は太郎に「ケーキ／*ゴミ」を焼いてやった。(三宅 1996: 2)

重要な指摘であるが、実例を広く観察してみると、B1 β 型の動詞は必ずしも作成動詞に限定されるわけではないことがわかる。B1 β 型には、次のような獲得動詞(対格名詞句は獲得物)も自然に生起する(加賀 1997, 澤田 2007 参照)。

- (36) それでも私は、やっぱり弱くて、良夫さんにハムを切ってあげたり, 奥さんにお漬物とってあげたり奉仕をするのだ。(太宰治『女生徒』)

- (37) 我が子にきちんとした居場所を見つけてあげたい。

(『讀賣新聞』1999年5月16日, 朝刊)

- (38) 高学年の小学生が小さな子にセミの抜け殻を集めてあげたり, ミミズを捕まえてあげたりする光景も見られるようになった。

(『讀賣新聞』2002年12月7日, 朝刊)

作成動詞や獲得動詞に比べるとややマージナルであるが、次のような実例から、一部の対象変化動詞も B1 β 型に生起し得るようである(加賀 1997, 澤田 2007 参照)。以下の例の対格名詞句は、生産物／結果目的語ではない点に注目されたい。

- (39) 隊長はみんなにメザシを熱く焼いてくれた。

(『朝日新聞』2002年2月11日, 夕刊)

- (40) 筆記用具といえば鉛筆だった幼いころ、夕食後に食卓で宿題をする私たちに母が鉛筆を削ってくれた。(『朝日新聞』1999年8月15日, 朝刊)

⁸ 同様に、(20) の「教えてやる」のような B1 α 型の事例についても、同じ B1 α 型の構文型で表せるかは、言語によって差が出る可能性がある。実際、マラーティー語では、「手紙を書いてやる」や「お金を送ってやる」のような授与物が具体物である事例は成立するが(3.2 節(94), (95)の例を参照)、前項動詞が同じ 3 項動詞でも、授与物が抽象物となる「フランス語を教える」のような事例は成立しないとされる(Pardeshi 1998: 160)。ただし、マラーティー語では、「戸を開けてやる」のような事例(B1 β 型)は成立するようである(Pardeshi 1998: 155 を参照)。

- (41) それでも私は、やっぱり弱くて、良夫さんにハムを切ってあげたり、奥さんにお漬物としてあげたり奉仕をするのだ。(太宰治『女生徒』)

これらの前項動詞が表す行為は、B1 β 型の「てやる／てくれる」が表す物の授与の「前段階」の行為として解釈可能であり、2つの行為は、継起的関係をなす行為として意味合成される。それゆえ、物の授与へとつながらないような行為を表す動詞（たとえば、「(ゴミを)焼く」)は、B1 β 型には生起しにくいことになる。

第4に、基準IVの観点によれば、B1 α 型と同様、B1 β 型の「てくれる／てやる」が取る項の数は、「Xガ」、「Yニ」、「動詞句」の3つである。

B1 α 型、B1 β 型共に、与格名詞句Yが受け取るのは、物を含んだ行為であり、結果としてYは物も受け取る（そのため、Yは行為の受け手であると同時に、物の受け手であるという二重の役割を担う）。B1 α 型、B1 β 型共に、B1型では、A型に比べ、物の授与的意味が弱化しているという意味的特徴が見られたが、これは、B1型（B1 α 型／B1 β 型）では、後項の授与動詞の項「Yニ」と前項動詞の項「Zヲ」が構造上同じ階層にないという統語的特徴とパラレルをなす。

以上の分析からも、現代日本語の授与動詞構文において、本稿でB1型（B1 α 型／B1 β 型）と称する構文型（=7b）が存在することが裏づけられるのである（B1 α 型では、「…」の位置に、「Yニ」と同一指示対象の与格名詞句が含まれる）。

- (42) B1型：[XガYニ [… Zヲ V] テクレル／テヤル] (=7b)

2.4. B2型

以下は、全てB2型の「てくれる」「てやる」の例である。

- (43) 「君の命は自分が守ってあげる」と言い、私を抱きしめてくれた。
(『朝日新聞』2009年1月19日、朝刊)
- (44) 昭和39年、そんな私たちを義兄夫婦が、別府温泉へ連れて行ってくれた。
(『朝日新聞』2008年4月18日、朝刊)
- (45) 「汗をかいたままだと風邪ひくよ」。口すっぱく、祖母は真夏に汗だくの私を捕まえ、よく汗をふいてくれた。(『朝日新聞』2007年8月15日、朝刊)
- (46) 「偉かったね」と孫をほめてやった。(『朝日新聞』1999年3月24日、朝刊)
- (47) 毎日、孫の喜ぶ所へ連れて行ってやった。
(『朝日新聞』1999年9月7日、朝刊)
- (48) 母は涙ながらに彼のまぶたをハンカチでふいてあげたという。
(『朝日新聞』2008年6月10日、朝刊)

IからIVの基準に照らしながら、B2型の意味的・統語的特徴を見ていこう。

第1に、基準Iの観点によれば、授与物の存在を含意せず、与格名詞句を項に取らないことなどから、B2型の「てくれる」「てやる」は物の授与性を失っている。

第2に、基準IIの観点によれば、主語名詞句は恩恵を施す意図を有する。この

意味で、B2型の主語名詞句も有生物に制限される。

第3に、基準IIIの観点によれば、物の授与性を失ったことの帰結として、前項動詞のクラスは、物の授与行為と同時関係や継起関係をなす動詞から制限が解放され、意志動詞一般にまで生起範囲が広がっている。それゆえ、次のような（主語名詞句の意図性を含意する）非能格自動詞（「行く」、「居る」等）も生起可能となる。

- (49) 子どもが読書を楽しむようになるには、子どもの身近に、読書活動を応援できる大人がいてあげることがとても重要です。

（『朝日新聞』2013年3月12日、朝刊）

第4に、基準IVの観点によれば、「てくれる」「てやる」が取る項の数は、「Xガ」と「動詞句」の2つである。B2型では、物の授与性がないため、「てくれる」「てやる」は与格名詞句をそれ自身の項としては取れない。

以上の分析から、現代日本語の授与動詞構文において、本稿でB2型と称する構文型（=7c）が存在することが裏づけられる⁹。

- (50) B2型：[Xガ[… V] テクレル/テヤル] (=7c)

本稿では、「太郎が花子をほめてやった」のような受益者が目的語として実現する他動詞ベースの事例と、「太郎が花子の代わりに走ってやった」のような受益者が付加詞として実現する自動詞（非能格自動詞）ベースの事例とを、同じB2型に収めているが、両事例とも、上の(50)の構文型をなす点では同じである。

- (51) [太郎が[花子をほめ] てやった]
 (52) [太郎が[花子の代わりに走っ] てやった]

授与動詞構文の分析において、表面的な格パターンではなく、階層的な統語構造の把握が重要となることを示すために、さらに次の例を見てみよう。

- (53) 太郎は梅さんに大トロを注文してやった。

⁹「てやる」には、次の(i)のように、行為の受け手（受影者）の存在が想定しにくく、主語名詞句である話し手の強い意志や自暴自棄を表す用法が存在する。また、「てくれる」にも、(ii)のように、恩恵を表さない「てやる」に置換可能な用法が存在する。それぞれ、山田(2004:202)が、「受影者不在型テヤル」、「遠心的非恩恵型テクレル」と呼ぶ用法である。

- (i) 十六日午後三時三十五分ごろ、京都市中央区の京都新聞社で、受付を訪れた北区の自称無職の女(52)がバッグから包丁を取り出し、「死んでやる」と叫びながら近くの階段を八階まで駆け上がった。（『京都新聞』2008年4月17日、朝刊）
 (ii) どうかすると、大人が子供をめぐけて、石を振上げて、「野郎一殺してくれるぞ」などと戯れるのを見ることもある。（島崎藤村『千曲川のスケッチ』）

この種の「てやる」「てくれる」は、物の授与性も恩恵の意味も表さないが、主語名詞句との間の選択制限を有する点で、B2型の構造をなす事例として分析される（もっとも、(i)の「てやる」は、「与える」を意味する「やる」ではなく、「物事を行う、する」を意味する「やる」（例：野球をやる）を引き継いだ用法とも考えられる）。

(53) は 2 つの解釈ができる。1 つは、梅さんが大トロの受け手となる解釈である。すなわち、太郎は、梅さんに大トロを御馳走してやろうとしたのである。もう 1 つは、梅さんが注文の受け手となる解釈である。太郎は、寿司屋の梅さんのために（たとえば、梅さんの売り上げを上げてやるために）、梅さんに大トロを注文したのである。それぞれの解釈の違いは、B1 β 型、B2 型という統語構造の違いとして説明できる¹⁰。

- (54) a. [太郎は梅さんに [大トロを注文し] てやった] (B1 β 型)
 b. [太郎は [梅さんに大トロを注文し] てやった] (B2 型)

「梅さんに」は、(54a) では「てやる」の項、(54b) では「注文する」の項として機能する（「注文する」は、(54a) では 2 項動詞、(54b) では 3 項動詞である）。(53) の曖昧性は、B1 型と B2 型の区分为本質的に重要であることを示唆している¹¹。

2.5. B3 型

以下は、全て B3 型の「てくれる」の例である。

- (55) 工学部 4 年の姫野哲全さん (23) はツイッターで知り、思わず鳥肌が立ったという。「医学部で iPS 細胞についての勉強をしていたので身近に感じていた。いつかは取れると思っていたが、こんなに早く受賞してくれて本当にうれしい」
 (『朝日新聞』2012 年 10 月 09 日、朝刊)
- (56) 「車の中ではなく、暖かい布団の上で亡くなってくれてよかった」。(略) 医師の診断は、疲れによる急性心不全だった。
 (『讀賣新聞』2004 年 11 月 2 日、朝刊)
- (57) 連戦は嫌だなと思っていたら、雨が降ってくれた。
 (『讀賣新聞』2006 年 7 月 22 日、朝刊)

¹⁰ 1 つ目の解釈は、B1 α 型には分析できない。「てやる」の支えのない「梅さんに大トロを注文する」（梅さん＝客の場合）は不適格だからである。また、2 つ目の解釈のほうも、B1 α 型には分析できない。梅さんは、すし屋であり、大トロの受け手ではないからである。

¹¹ 査読者のお一人より、本稿の B1 型、B2 型の授与動詞構文と、山田 (2004) の「直接ベネファクティブ構文」、「間接ベネファクティブ構文」との違いについて質問があった。

山田 (2004: 29-31) によれば、直接ベネファクティブ構文（直接構造）とは、事態（動詞）の項が受益者となる構文であり（例：太郎に本を売ってやった）、間接ベネファクティブ構文（間接構造）とは、事態に含まれない参加者が受益者となる構文であるとされる（例：太郎のために走ってやった）。ここでの直接／間接の区分は、受身文の直接／間接にも通底する区分である点で興味深い。分類視点の相違により、本稿の B1 型、B2 型の区分とは対応しない。

たとえば、統語構造に着目する本稿では、(51) と (52) の例は、同じ統語構造をなすため、共に B2 型の授与動詞構文の事例に位置づけられるが、文構成上における受益者の位置に着目する山田 (2004) の分類に従えば、(51) は直接ベネファクティブ構文、(52) は間接ベネファクティブ構文の事例に位置づけられる。また、(53) は、本稿では、(54a) と (54b) の統語構造の違いから、B1 β 型と B2 型とに多義的な事例とされるが、山田 (2004) の分類に従えば、(54a)、(54b) は、共に直接ベネファクティブ構文となる（本稿の B1 β 型に相当する事例は、山田 (2004: 95) では直接ベネファクティブ構文（直接構造）として整理されている）。

- (58) 会場は風が強かったが、私が撃つときだけは、なぜかやんでくれた。
 (『讀賣新聞』2002年3月9日, 夕刊)
- (59) 混戦を制したのはスマイルトゥモローだった。「行くところ行くところ、前がうまくあいてくれた」
 (『朝日新聞』2002年5月20日, 朝刊)
- (60) 私の家では残暑の厳しかった先月末, 2鉢に美しいピンクのミニシクラメンの花が咲いてくれた。
 (『朝日新聞』2003年9月10日, 朝刊)
- (61) 「この秋ごろからは、カムバックした都はるみさん関連の作品が売れてくれるのを祈っています」
 (『朝日新聞』1990年5月25日, 朝刊)
- (62) 固まるまでに時間がかかり、熱も冷めてくれることがわかった。
 (『讀賣新聞』2002年5月17日, 朝刊)

B3型では、「てやる」は使えず、この構文型において、「てくれる」と「てやる」は非対称的な振る舞いを示す(例: 雨が降っ {てくれた/*てやった})。

IからIVの基準に照らしながら、B3型の意味的・統語的特徴を見ていこう。

第1に、基準Iの観点によれば、授与物の存在を含意せず、与格名詞句を項として取らないことなどから、B3型の「てくれる」は物の授与性を失っている。

第2に、基準IIの観点によれば、主語名詞句は恩恵を施す意図を持たない。B3型の「てくれる」には、次のような無主語文の例すら存在する¹²。

- (63) 担当者は「予報通り、いい天気になってくれれば」と語った。
 (『讀賣新聞』2013年5月21日, 朝刊)
- (64) 先日の大雪で寒さを心配したが、暖かくなってくれて良かった。
 (『朝日新聞』2001年1月21日, 朝刊)

B3型では、主語名詞句と「てくれる」との間の選択制限も消失している。それゆえ、主語名詞句には有生物以外に無生物も実現し得る。

第3に、基準IIIの観点によれば、主語名詞句は恩恵を施す意図を持たないため、B3型では、意志動詞に加え、非行為的な変化を表す無意志動詞も生起できる。

では、非行為的な状態を表す状態動詞はどうか。「てくれる」と状態動詞との共起性については、高見・久野(2002)に興味深い議論がある。高見・久野(2002: 303)は、「てくれる」における事象が[-恒常的状态]でなければならないとする条件(以下、「-恒常性の条件」)を提出し、「てくれる」は、通例、[+恒常的状态]を表す状態動詞とは共起できないとする¹³。

¹² 「いい天気になる」や「暖くなる」(天候の場合に限る)などは、特定の主語を持たない述語だけの文であり、ヨーロッパの諸言語に見られる「非人称構文」に近い性質を持つといえる。それゆえ、「いい天気になってくれたね」という発話を受けて、「何が?」と具体的な主語を問うような発話は不自然である。

¹³ 一般に、「いる」も状態動詞に含められるが、「てくれる」(さらには、「てやる」)と自然に共起する。

- (i) ボディーガードがいつもそばにいてくれるので安心だ。

- (65) a. *太郎が、中華料理が好きであってくれて、よかった。
 b. ??このナイフはよく切れてくれて、助かる。
 c. *団地のそばにコンビニがあってくれて、いつも手軽に買物ができる。
 (高見・久野 2002: 300)

高見・久野 (2002: 303) によれば、「授与動詞「くれる」は、「人がこちらに物を与える」という行為、変化を表わすために、その補助動詞「～てくれる」も「～て」の埋め込み文の部分に、行為、変化を表わす事象を要求することになり、よって、「主語指示物が何も行わず、何の変化もしないで恒常的な状態にあることを示す事象は、この構文に現われない」のだという。

高見・久野 (2002) の指摘は、「てくれる」構文の拡張のプロセスを考える上で極めて示唆的であるが、考慮すべき課題もある。高見・久野 (2002: 354) では、「-恒常性の条件」が「てくれる」以外に「てやる」にも同等に適用されているが、実際には、両授与動詞では状態動詞との共起性に差が見られる。

- (66) a. OK/?家のすぐ傍にコンビニがあってくれる (ので助かる)。
 b. *家のすぐ傍にコンビニがあってやる。

a 文の「てくれる」は話者によって判断がゆれるが、b 文の「てやる」ほどの強い違反はない。実際、「てくれる」が状態動詞と共起する実例は確認できる¹⁴。

- (67) a. プロフェッショナルになる必要は全くないが、科学が好きであってくれることが極めて大事。
 (『科学技術・学術審議会人材委員会 (第 25 回) 議事概要』)

金田一 (1976: 14) は、「いる」は、「いろ」というように (聞き手に対する) 命令形にできることから、「状態動詞の中、継続動詞に一步近いものである」とみなしている。この指摘を踏まえるならば、(i) の例は、高見・久野 (2002) の「-恒常性の条件」に対する反例とはならない。実際、高見・久野 (2002: 304) も、「いる」は、「ある」と異なり、人がある場所に留まるという動作が継続することを表し、[-恒常的状态] であるとしている。

¹⁴ 高見・久野 (2002) は、状態動詞「ある」は、次の (i-a) のように、「仮定法」の文脈で用いられた場合や、(i-b) のように、「意外な新しい発見」の文脈で用いられた場合には、「てくれる」と共起可能になるとする (√は適格のマーク)。

- (i) a. 団地のそばにコンビニがあってくれたら、すいぶん助かるのに!
 (高見・久野 2002: 306)
 b. √ / (?) 封筒の束をかかえて郵便局へ向かっていたところ、近くにメールボックスがあってくれて助かった。
 (高見・久野 2002: 308)

a 文は、コンビニがある状態に「変化する」ことを願望した文、b 文は、ないと思っていたメールボックスがあったという「変化、出来事 (およびその変化/出来事に伴う結果の残存)」として捉えられた文であり、共に [-恒常的状态] と解釈可能であるため、「てくれる」文として適格となるという。

この議論によれば、(67c, d) も、「すずらん本屋堂」や「AA (アルコホリック・アノニマス)」の「意外な新しい発見」を表すため、「てくれる」が状態動詞「ある」と共起可能となっていると分析されることになろう。しかし、私見によれば、これらの例は、必ずしも「すずらん本屋堂」や「AA」の「意外な新しい発見」と解さない解釈も許容されると思われる (ただし、(67c)、(67d) は、(65c)、(66a) と異なり、過去の状態について描写した例である)。

- b. セラミック包丁だと、火あぶりしなくてもよく切れてくれるし、切り離れもばっちりで、大満足ですね。(http://plaza.rakuten.co.jp/putinavi/diary/?ctgy=8)
- c. BS11 では、この春始まった「宮崎美子のすずらん本屋堂」(火曜午後 10 時) を放送中だ。司会の宮崎美子さんと、3 月で終了した NHK・BS の「週刊ブックレビュー」で司会を務めた中江有里さんの女優 2 人が、書評番組について語り合った。(略)「『ブックレビュー』は残念ながら終わってしまったので、『すずらん本屋堂』があってくれて良かった。」
(『讀賣新聞』2012 年 7 月 29 日、朝刊)
- d. それでも AA (アルコールック・アノニマス) に通い続け、ついに断酒に成功した。「(略) どん底の人生にいることに気が付き、観念できたんです。AA があってくれたので助かった」
(『朝日新聞』1995 年 1 月 29 日、朝刊)

総じて、「てくれる」は、その事象に変化のない状態動詞も許容する方向にあるといえる。状態動詞との共起性に揺れがあるとするれば、それは、「てくれる」構文が未だ変化・拡張の途上にあることを示しているといえよう¹⁵。

¹⁵ このような「てくれる」構文における事象拡張(及び、状態的事象との共起性に関する容認度の揺れ)に関する議論は、興味深い一般言語学的議論へと発展可能である。「てくれる」構文と極めて似たような状況が英語の「I wish S *would* V」構文(または「If (only) S *would* V」構文)(「S が V してくれたら(なあ)」)でも認められる。仮想動詞 wish (If (only)) の補文に現れる *would* は、本来、補文主語の「意志」を表す力動的 *would* (「意志」を表す will の仮定法過去形)である。それゆえ、補文動詞は有生物主語の意志動詞であるのが一般的である。ところが、興味深いことに、「I wish S *would* V」(「If (only) S *would* V」)構文の補文動詞は、以下のような無意志動詞にも使用範囲が広がってきている。澤田治美(2011: 43)が仮想動詞 wish (If only) の補文に現れる「*would* の意志性の意味拡張」と呼ぶ現象である。

- (i) a. I wish it *would* rain.
b. I wish it *would* stop raining. (It will keep on raining!) (Swan 1995: 629)
c. I wish the sun *would* come out. (Thomson and Martinet 1986: 262)
d. I wish prices *would* come down. (Thomson and Martinet 1986: 262)
e. I wish this clock *would* work. (Leech 2004: 123)
f. I wish my lottery ticket *would* come up. (澤田 2011: 43)

Swan (1995: 629) や Declerck (1991: 439) は、この種の無生物名詞も、人間名詞に準じて意志や自発性(willingness)があるかの如く捉えることが可能であるとみる。この分析は、a 文から c 文のような「雨」「日(太陽)」などの「自然の力」を持つ無生物名詞の例に対しては説明可能かもしれないが(3.1 節も参照)、d 文から f 文のような自らの力を持たない無生物名詞の例に対しては自然な説明が困難となる。ここでの *would* の意志性は、相当程度希薄化しており、それに伴い、*would* と補文主語との間の選択制限も消失しているとみるべきである。*would* と補文主語との間の選択制限の消失により、補文事象が非行為的事象にまで広がってきているのである。事象拡張の視点から捉え直すことで、ここでの現象の本質が見えてくる。

一般に、規範文法では、状態的事象は「I wish S *would* V」構文には生じし得ないとされるが(例: *I wish our flat *would* be a bit bigger./*I wish it *wouldn't* be so cold today.) (Murphy 2000: 77 参照)、Declerck (1991) は、次のような状態的事象の例を認めている。

- (ii) I wish there *wouldn't* be any fog tomorrow morning (but the weather forecasters say there will be).
(Declerck 1991: 439)

最後に、基準 IV の観点によれば、B3 型の「てくれる」は、事象（節）全体を項に取っており、「てくれる」が取る項の数は 1 つとなっている。

以上の分析からも、現代日本語の授与動詞構文において、本稿で B3 型と称する構文型（= 7d）が存在することが裏づけられるのである（「X ガ」を丸括弧で括っているのは、(63)、(64) のような無主語文の例もあるからである）。

(68) B3 型：[[X ガ] … V] テクレル/*テヤル] (= 7d)

この構造に反映されるように、B3 型の「てくれる」は、事象全体からの話者の受益を表す。B3 型に生起する主語名詞句は恩恵を施す意図を持たない。

面白いのは、B3 型の「てくれる」のみ「てくださる」に尊敬語化できない（しにくい）という点である。すなわち、「てくださる」は、主語名詞句との間に選択制限を有し、[[事象] テクダサル] という B3 型の構文型を持たない。「てくださる」の主語名詞句は、恩恵を施す意図を持つ人間名詞に制限されるのである（それゆえ、動詞も意志動詞に制限される）。

(69) *雨が降ってくださった。

(70) ?課長が異動になってくださった。

前節では B1 β 型と B2 型とに曖昧となる事例（= 53）を指摘したが、B2 型と B3 型とに曖昧となるような事例もある。次の例は、鈴木君が私のために（たとえば、私を勝たせてやるために）わざと転んだ場合には、鈴木君は恩恵を施す意図を持つため、B2 型の事例である。一方、鈴木君は、うっかり転ぶなどして話し手に恩恵を施す意図はなかった解釈もあり得る。この場合には B3 型の事例と分析される。

(71) （徒競走で）鈴木君が転んでくれた。

韓国語の「V + 授与動詞 (*cwuta*)」は、前者の解釈では成立するが、後者の解釈では成立しにくい。主語名詞句が恩恵を施す意図を持たない（授受関係が認められない）B3 型の「てくれる」は、日本語授与動詞構文の興味深い特色の一つである¹⁶。

ただし、この種の状態的事象の例については不自然とみなす話者もあり、I wish 構文の補文における状態的事象の生起には未だ揺れがあるといえる。次の例も状態的事象の例であるが、Swan (1980) は不適格な文とみなす。

(iii) *I wish there *would* be a strike tomorrow. (Swan 1980: 632)

「てくれる」構文、および、ここでの「I wish S would V」構文の議論から、補文を取る構文現象一般における事象拡張のプロセスとして、次のような一方向的なプロセスが仮説として提示できる。

(iv) 補文を取る構文現象における事象拡張のプロセス：
行為的事象 → 非行為的事象（変化） → 非行為的事象（状態）

¹⁶ B3 型の「てくれる」構文は、益岡 (2013) が「評価表示機能を持つテクレル構文」と呼ぶものと対応をなすと考えられる。益岡 (2013: 28) は、評価表示機能を持つ「てくれる」構文

「くれる」が B3 型まで拡張し得た背景には、「くれる」の特殊性が関係している。「くれる」は、動作主を含む行為動詞であるにも関わらず、「* くれたい / * くれたがる」、「* くれてあげる」、「* くれてもらう」、「* くれてみる」など、いかなる動作主-主語の述語の補部内にも生起し得ない極めて特異な文法的振る舞いをなす（「くれる」が「やる」の意味で用いられる場合を除く）。この特異な文法的振る舞いは、「くれる」が動作主を含む行為動詞でありながらも、「動作主の授益」ではなく、「話し手の受益」に焦点を当てた授与動詞である点に起因する。このように、「くれる」は、動作主による授益に焦点を当てた授与動詞ではないために、動作主の存在を含意しない非行為的事象までも補文に取る B3 型にまで拡張し得たのだといえる。一方、「やる」は、動作主による授益に焦点を当てた動詞であるために、「てやる」へと文法化を遂げた後も、補部の事象は、恩恵を施す意図を有する動作主の存在を含意する行為的事象に制限され、B3 型までは拡張し得なかったといえる。

2.6. 各構文型の諸特徴のまとめ

以上見てきた各構文型の諸特徴をまとめたのが次の表である。

表2 日本語授与動詞の各構文型の諸特徴

	A 型 (本動詞型)	B 型 (補助動詞型)			
		B1 型		B2 型	B3 型
		B1 α 型	B1 β 型		
基準 I: 物の授与性	○	△	△	×	×
基準 II: 主語の恩恵を施す意図	○	○	○	○	×
基準 III: 前項動詞のクラス		所有変化動詞, 位置変化動詞, 所有・位置変化動詞	作成動詞, 獲得動詞, 対象変化動詞 (一部)	意志動詞	意志動詞, 無意志動詞 ¹⁷
基準 IV: 授与動詞が取る項の数	3	3	3	2	1

を「コトの授受」の関与が認められず、専ら当該事態に対する話し手の受益感を明示する表現（それゆえ、「純粋な恩恵構文」と特徴づけている。たとえば、次の例に出現する「てくれる」は、いずれも「実体のある恩恵の受け取りというよりも、当該の事態を好ましいものとして受け取るという評価を表す働きをしている」と分析されている。

- (i) 16 年前の阪神淡路大震災の直後にはオリックス・ブルーウェーブが 2 連覇をしてくれた。東日本大震災という日本の国難に対して、なでしこジャパンは世界で優勝してくれて、まさしくそのような意味で大きなエネルギーを持ち帰ってくれた。
(NHK ニュース KOBE 発, 2011.7.19) (益岡 2013: 28)

本稿の述べ方に換言するならば、ここでの「てくれる」文の主語名詞句（オリックス・ブルーウェーブ、等）は、話し手に対して恩恵を施す意図をもって当該の事象を実現したとは解釈できないことから、(B2 型ではなく) B3 型の「てくれる」の例ということになる。

なお、韓国語では、(i) の例の「てくれる」文は、V-a/e cwuta (V てくれる) (例: 2 *yenphay-lul hay cwuessta* (2 連覇をしてくれた)) ではなく、動詞単独形 (例: 2 *yenphay-lul hayessta* (2 連覇をした)) で表すのが自然である。韓国語の授与動詞構文については、3.1 節で詳述する。

¹⁷ ただし、状態動詞が B3 型に生起するか否かの判断は母語話者の間で未だ揺れがある。

この表から、B1型 (B1 α 型, B1 β 型), B2型, B3型の順に、A型の特徴から離れていくことが明瞭に見て取れる (B1型, B2型, B3型に進むに従い、前項動詞のクラスの範囲が広がっていく点にも注目されたい)。ここから、これらの構文パターンは、単なる共時的変異に留まらず、文法化の度合いを反映した連続性を有するパターンである点が指摘できる (後述する「前項動詞と物の授与との意味的調和」(図1)の視点からみると、さらに、B1 α 型よりB1 β 型のほうが文法化の度合いが高いといえる)。歴史的・通時的な調査は今後の課題として残されるが、A型の特徴がどの程度保持されているか (ないしは、失われているか) を意味と統語の両面から見ることで、B型の文法化の度合いは共時的にも測定可能である。各構文型の違いを論証するために設定した4つの基準は、授与動詞の文法化の度合いを共時的に測定する基準ともなる。

あり	物の授与性	なし
あり	主語名詞句による恩恵付与の意図性	なし
高い	前項動詞と物の授与との意味的調和	低い
多い	授与動詞が取る項の数	少ない
低い←	授与動詞の文法化の度合い	→高い

図1 授与動詞の文法化の度合いの測定基準

このうち、「前項動詞と物の授与との意味的調和」とは、B型に生起する前項動詞が「くれる／やる」本来の「物の授与」の意味とどの程度意味的な調和をなすかという基準である。まず、B1 α 型に生起する動詞は、物の移動を含んでおり、物の授与行為と同時的關係をなす(前項動詞は、授与の具体的な様式を示す)。この点で、授与動詞と自然な意味合成が可能であり、物の授与との意味的調和が高い。次に、B1 β 型に生起する動詞は、物を含んだ行為であり、また、物の授与行為と継起的關係を形成し得る点で、意味の合成は可能である。ただし、物を作成したり手に入れたりすること、物を与えることとは基本的には別の行為である。その意味では、B1 α 型の動詞に比べ、物の授与との意味的調和は低い。さらに、B2型に生起するのは、意志動詞一般であるが、意志動詞は物を含んだ行為とは限らない。意志動詞は、行為性という点でのみ、物の授与と意味的調和が認められるに過ぎない。最後に、B3型では、意志動詞のみならず、無意志動詞も生起し得るが、無意志動詞に至っては、行為性すらなく、物の授与との意味的調和はさらに低下する。

このように、「物の授与」との意味的調和が低い動詞が生起する授与動詞構文の事例ほど、後項の授与動詞の文法化が進んでいるとみることができるのである。

図1の測定基準に則した場合、共時的には、B1 α 型, B1 β 型, B2型, B3型の順に授与動詞の文法化の度合いが強まっているとみなすことができる。A型の特徴から最も離れたB3型が文法化の最も先端に位置する型と推定される。

Shibatani (1994: 69, 1996: 191) は、GIVEスキーマに支配された補助動詞「てや

る／てくれる」(B1型)は、3項関係をなす本動詞「やる／くれる」(A型)の古い特徴を受け継ぎつつも、授与の対象が「具体物」から「抽象的な実体である行為」へと比喩的に拡張している点で、本動詞「やる／くれる」にはない新たな特徴を獲得しているとする。A型とB1型の連続性を想定している点は本稿の想定とも一致するが、本稿ではさらに、A型から、B1 α 型、B1 β 型、B2型、B3型までの連続性を想定している。

3. 授与動詞構文の言語対照

本節では、日本語と同様、授与動詞(GIVE動詞)を「V + 授与動詞」の形で使う言語として、韓国語¹⁸、マラーティー語、中国語を取り上げる。ここでは、日本語の授与動詞構文で行った構文パターンの類型化の視点が、これらの言語の授与動詞構文を分析する際にも有効な視点となることを論じる。

3.1. 韓国語の授与動詞構文

韓国語の授与動詞は、「くれる／やる」のような直示的な方向性の違いによる語彙的对立をなさず、*cwuta* (주다) 一語でまかなわれる。*cwuta*は、複合動詞の後項(または、補助動詞相当形式)である *-a/e cwuta* (B型)へと文法化している。次の(72)、(73)、(74)、(75)は、それぞれ、A型、B1 α 型、B1 β 型、B2型の構文型に対応する(ローマ字転写はイェール式に基づく。*cwuta*は、方向性において中立的な授与動詞であるため、グロスには便宜的に「与える」を付しておく)。

- (72) *na-nun hanakko-eykey chayk-ul cwu-essta.*
私-は 花子-に 本-を 与える-た
「私は花子に本をやった」 (A型)
- (73) *na-nun hanakko-eykey kkoch-ul senmwulhay cwu-essta.*
私-は 花子-に 花-を プレゼントして 与える-た
「私は花子に花をプレゼントしてやった」 (B1 α 型)
- (74) *na-nun hanakko-eykey cip-ul cie cwu-essta.*
私-は 花子-に 家-を 建てて 与える-た
「私は花子に家を建ててやった」 (B1 β 型)
- (75) *na-nun hanakko-lul chingchanhay cwu-essta.*
私-は 花子-を ほめて 与える-た
「私は花子をほめてやった」 (B2型)

B1 β 型の(74)から *-a/e cwuta* を取り除いた次の例は不適格となる。(74)の与格名詞句(*hanakko-eykey*)は、*-a/e cwuta*によって導入された項だからである。

¹⁸ 本稿では、インフォーマント調査の協力者が韓国出身であるため、現在、朝鮮半島南部地域で用いられている朝鮮語という意味で韓国語という名称を便宜的に用いる。

- (76) ??*na-nun hanakko-eykey cip-ul ci-essta.*
私-は 花子-に 家-を 建てる-た
「私は花子に家を建てた」

B1 β 型の *-a/e cwuta* 構文は、次のように、動詞句が示す行為によって生まれた抽象的な事物（通路、声（厳密には、声を伴った本の内容））を授与物とする次のような例でも使える（対格名詞句の戸や本が授与物とはならない点に留意されたい）。本を読むという行為自体は、「黙読」と「朗読」の両方があるが、(78) では、「朗読」の意味に限定される。「朗読」からは、声という一種の物が作成され、その声が与格名詞句への授与物として解釈できるからである（三宅 1996: 95 参照）。

- (77) *na-nun hanakko-eykey mwun-ul yele cwu-essta.*
私-は 花子-に 戸-を 開けて 与える-た
「私は花子に戸を開けてやった」 (B1 β 型)
- (78) *na-nun hanakko-eykey chayk-ul ilke cwu-essta.*
私-は 花子-に 本-を 読んで 与える-た
「私は花子に本を読んでやった」 (B1 β 型)

このように、日本語と韓国語の B1 型の授与動詞構文の統語構造はパラレルであり、B1 α 型、B1 β 型における前項動詞のクラスも両言語で基本的に一致する¹⁹。

韓国語の B2 型の *-a/e cwuta* 構文も、日本語の B2 型の「てくれる／てくれる」構文とパラレルな統語構造を有する。B2 型の *-a/e cwuta* は、物の授与を表さず、与格名詞句を項として取らないため、意図的行為であれば自動詞も実現し得る (Shibatani 1994: 52 も参照)。

- (79) *khayn-i hanakko-taysin sicang-ey ka cwu-essta.*
ケン-が 花子-(の)代わりに 市場-へ 行って 与える-た
「ケンが花子の代わりに市場へ行ってやった」 (B2型)

日本語と韓国語で顕著な相違をなすのは、B3型である。以下の例は総じて適格性の度合いが低い。3名の韓国語母語話者のインフォーマントによる容認度の判断を A|B|C で示す（容認度判定は、[OK, (?), ?, ??, *] の5段階評価による）。

- (80) *|* *yek apb-ey leysutholang-i sayngkye cwu-essta.*
駅の前-に レストラン-が^g できて 与える-た
「駅前にレストランができてくれた」
- (81) ??|* *ppallay-ka malla cwu-essta.*
洗濯物-が^g 乾いて 与える-た
「洗濯物が乾いてくれた」

¹⁹ Shibatani (1994), You (1997), 韓 (2008), Song (2010), 井上 (2011) には、本稿でいう B1型(とりわけ B1 β 型)の *-a/e cwuta* 構文についての詳しい議論がある。合わせて参照されたい。

- (82) ?|**mwulka-ka naylye cwu-essta.*
 物価-が 下がって 与える-た
 「物価が下がってくれた」
- (83) ?|??|?*nwun-i noka cwu-essta.*
 雪-が とけて 与える-た
 「雪がとけてくれた」

明示的な主語名詞句を持たない次のような無主語文の例も不適格となる。

- (84) *|**sensenhaycye cwu-essta.*
 涼しくなって 与える-た
 「涼しくなってくれた」
- (85) *|**ttattushaycye cwu-essta.*
 暖かくなって 与える-た
 「暖かくなってくれた」

以下も非行為的事象を表す例であるが、興味深いことに、上の(80)–(85)の例に比べ、相対的に高い許容度を示す。

- (86) (?)(?)(?) *pi-ka {wa/ naylye} cwu-essta.*
 雨-が 降って 与える-た
 「雨が降ってくれた」
- (87) (?)(?)? *pi-ka kuchye cwu-essta.*
 雨-が やんで 与える-た
 「雨がやんでくれた」
- (88) (?)(?)(?) *palam-i pwule cwu-essta.*
 風-が 吹いて 与える-た
 「風が吹いてくれた」
- (89) (?)(?)? *palam-i kuchye cwu-essta.*
 風-が やんで 与える-た
 「風がやんでくれた」
- (90) ?|(?)|OK *hay-ka pichye cwu-essta.*
 日-が 差して 与える-た
 「日が差してくれた」

これらの例の容認度の高さは、どのように考えればよいであろうか。

そのヒントの1つとなるのがいわゆる名詞句階層(ないしは、有生性階層)である。名詞句階層においては、同じ無生物名詞でも、「雨」「風」「日(太陽)」などの「自然の力」を持つ名詞は、自らの力を持たない他の無生物名詞よりも、相対的に有生物名詞に近い階層に位置づけられる。Silverstein (1976) をもとに、角田 (1991: 39) では、次の階層が示されている(「人間名詞」から右に行くに従い、有生性

(animacy) が低下していく)。

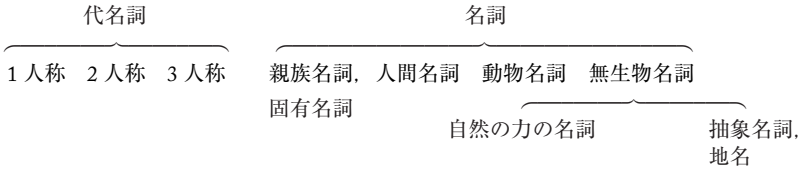


図2 名詞句階層 (角田 1991: 39)

「雨」「風」「太陽」のような自然の力を持つ名詞が関与する（または、それら自らが引き起こす）気象現象は、有生物が関与する（または、有生物が自ら引き起こす）事象に準じた事象として認識しやすいのだといえる。すなわち、これらの自然の力を持つ名詞は、事象を発生させる内在的な力を備えているとみなせるのである（日本語の「Nのしわざ」のNは、普通、有生物名詞に制限されるが、「風のしわざ」などのように、自然の力を持つ名詞も拡張的に使われる場合がある点も参照されたい）。それゆえ、これらの気象現象は、基本的に有生物によって引き起こされた行為的事象を要求し、主語名詞句が恩恵を施す意図を有する *-a/e cwuta* 構文の中での使用が、比較的許容されやすいのだといえる²⁰。次の例も、非行為的事象であるが、主語名詞句は内在的な力を持った人間名詞であるため、相対的に高い許容度を示す。

- (91) ?[?]|OK *kenkanghan aki-ka thayena cwu-essta.*
 元気な 赤ちゃん-が 生まれて 与える-た
 「元気な赤ちゃんが生まれてくれた」

それに対して、(80)–(85) によって表される事象は、主語名詞句として実現している無生物名詞（「雪」、 「洗濯物」、等）が自らの力によって引き起こした事象ではなく、何らかの外的な要因によって引き起こされた事象といえる。(84), (85) は、そもそも主語名詞句が存在せず、また、そこでの事象も何らかの外的な要因によって引き起こされた事象である。一般に、このような事象は、*-a/e cwuta* 構文の事象としては実現しにくい。

また、植物は生物学的には有生物に含まれるが、次の例の許容度も総じて低い。

²⁰ 次の例は、気象現象といえるが、不適格である。

- (i) *|*|* *nalssi-ka cobacye cwu-essta.*
 天気-が よくなって 与える-た
 「天気がよくなってくれた」

「天気」とは、任意の場所・時刻の気象状態を表し、「天気」それ自体は、特定の「自然の力」を持つ名詞とはみなされないであろう（「天気がよくなる」のは、何らかの外的な要因（雨がやむ、等）によって引き起こされる事象といえる）。

- (92) ??|*|?? *kkoch-i phie cwu-ess-ta.*
 花-が 咲いて 与える-た
 「花が咲いてくれた」

この事実との関連で想起されるのが、日本語の被害受身文の二格名詞句における制約である。日本語の被害受身文の二格名詞句には、「雨」など自然の力を表す一部の無生物名詞などを除き、基本的に有生物名詞に制限されるが、植物は生起しにくいことが知られている(例: ? 雑草に生えられた / ? 花に枯れられた)。角田(1991: 39)は、「植物は生物学的には、生き物と見なされるのであろうが、文法現象の面で見ると、動物ではなく、無生物と同じ様な性質を示す」とし、「文法を論じるときは、植物は、普通、無生物に入れられる」と述べている。角田の見解は、韓国語の *-a/e cwuta* 構文の例や、日本語の被害受身文の例によっても支持されるといえる。

今後、韓国語の *-a/e cwuta* が事象の使用域を拡大させていく可能性は十分に考えられるが、現時点では、日本語の「てくれる」ほどは文法化(ないしは、事象拡張)が進行しておらず、B3型を十分に確立させていないといえる²¹。

一方で、*-a/e cwuta* が「てやる」ほど厳しくはB3型の事例を排除していないのも事実である(日本語で「*雨が降ってやった」、「*風が吹いてやった」などは全く容認されない)。これは、*-a/e cwuta* が「てやる」のような「授益」行為に特化した授与動詞ではない(中立的な授与動詞である)点に起因するものと思われる²²。

²¹ インフォーマント調査において比較的高い許容度の判定がなされた韓国語の例(86) - (91)は、ウェブにおいて確かに実例は見られるものの、(対応する日本語の例と比べると)その数は少ない。この点からも、韓国語において、B3型が十分に確立していないことが間接的に示唆される。

²² 韓(2008)は、次のような例の対比をもとに、本稿でいうB1 β 型では、韓国語の *-a/e cwuta* より日本語の「てやる(てあげる)」のほうが、文法化が進んでいると論じている。

- (i) a. **na-nun yenghuy-eykey chayk-ul sa-(a) cwu-ess-ciman,*
 私-は ヨンヒ-に 本-を 買って 与える-たが
acik (cenhay) cwu-ci anh-assta.
 まだ (渡して) 与える-ない-た
 b. 私はヨンヒに本を買ってあげたが、まだ渡していない。(韓2008: 81)

韓(2008)が述べるように、B1 β 型においては、*-a/e cwuta* のほうが「てやる(てあげる)」よりも「物の授与」の意味がより明確である。その意味では、「てやる(てあげる)」のほうが *-a/e cwuta* より、文法化(ないしは、意味の抽象化)が進んでいるという見方も成り立ち得る。

韓(2008)が論じているのは、B1 β 型という「同一の構文型における授与の意味の抽象化の度合い」であり、本稿で論じている「構文パターンの拡がりの度合い」とはレベルが異なる。授与動詞の文法化の対照研究においては、韓(2008)のような「同一の構文型における意味の抽象化の度合いの差」に注目したアプローチと、本稿のような「構文パターンの拡がりの度合いの差」に注目したアプローチの両方が可能である。本稿では、言語間での授与動詞の文法化の度合いの差は、後者の「構文パターンの拡がりの度合いの差」によって捉えられている。

3.2. マラーティー語の授与動詞構文

マラーティー語（インド・アーリア語派）の授与動詞も、直示的な語彙的対立をなさず、*deNe* 一語でまかなわれる。

Pardeshi (1998) は、Shibatani (1994, 1996) の GIVE スキーマに基づき、日本語とマラーティー語の対照を行っている。Pardeshi (1998) によれば、*deNe* の補助動詞構文では、与格名詞句が統語的に必ず符号化される必要があるとされる。これは、*deNe* の補助動詞構文が B1 型に制限されることを意味する。次の B1 α 型の (94), (95) や、B1 β 型の (96), (97) と異なり、B2 型の (98) は不適格となる²³。

- (93) *mI rAm-lA pustak di-l-e*
1SG Ram-DAT book.N give-PAST-N
「私はラムに本をやった」 (A 型) (Pardeshi 1998: 145)
- (94) *mI tyA-lA patra lib-Un di-l-e*
1SG he-DAT letter.N write-PTCPL give-PAST-N
「私は彼に手紙を書いてやった」 (B1 α 型) (Pardeshi 1998: 147)
- (95) *rAm-ne sitA-lA paise pAthaw-Un di-l-e*
Ram-ERG Sita-DAT money.N send-PTCPL give-PAST-N
「ラムはシタにお金を送ってやった」 (B1 α 型) (Pardeshi 1998: 160)
- (96) *rAm-ne sitA-lA sAykAl ghe-Un di-l-I*
Ram-ERG Sita-DAT bicycle.F take-PTCPL give-PAST-F
「ラムはシタに自転車を買ってやった」 (B1 β 型) (Pardeshi 1998: 147)
- (97) *shimpyA-ne rAm-lA sharT shiw-Un di-l-A*
tailor-ERG Ram-DAT shirt.M stitch-PTCPL give-PAST-M
「仕立て屋はラムにシャツを縫ってやった」 (B1 β 型) (Pardeshi 1998: 150)
- (98) **sitA-ne winnantI ke-lI mhaNun, mI bAjArA-t*
Sita-ERG request do-PAST because 1SG market-to
jA-Un di-l-e
go-PTCPL give-PAST-N
「シタに頼まれたので、私は彼女の代わりに市場へ行ってやった」
(B2 型) (Pardeshi 1998: 157)

Pardeshi (1998: 164) は、マラーティー語の授与動詞の補助動詞構文は、与格名詞句の生起が必須となり（すなわち、Shibatani のいう GIVE スキーマの構造に縛られ）、(98) のような例は不適格となることから、日本語の授与動詞構文よりも文法化が進んでいないという示唆的な指摘を行っている。本稿の文法化パターンの仮説によれば、さらに、B2 型を持たないマラーティー語の授与動詞は、B3 型も持た

²³ マラーティー語のグロス表記は次の通り。1: first person, DAT: dative, ERG: ergative, F: feminine, M: masculine, N: neuter, PAST: past tense, PL: plural, PTCPL: participle, SG: singular

ないことを予測する。事実、Pardeshi 氏（私信）によれば、次の授与動詞構文は不適格であり、本稿の予測を裏づける結果となっている。

- (99) **paaus paD-Un di-l-A*
rain.M fall-PTCPL give-PAST-M
「雨が降ってくれた」 (B3 型)
- (100) **kimati kami ho-Un di-l-yA*
prices.F.PL less become-PTCPL give-PAST-F.PL
「物価が下がってくれた」 (B3 型)
- (101) **phuulaa-ne umal-Un di-l-e*
flower.N.SG-ERG bloom-PTCPL give-PAST-N.SG
「花が咲いてくれた」 (B3 型)
- (102) **dzavaL peTrolpamp ho-Un di-l-A*
near petrol pump.M.SG be-PTCPL give-PAST-M.SG
「近くにガソリンスタンドがあってくれた」 (B3 型)
- (Prashant Pardeshi p.c.)

3.3. 中国語の授与動詞構文

中国語の授与動詞も、直示的な語彙的対立をなさず、「給」(*gěi*) 一語でまかなわれる。「給」は、物の受領者や行為の受益者のマーカー、さらには、受影文動作者マーカーや被使役者マーカーなど多様な機能語に文法化している (木村 2012: 235)。

中国語の授与動詞「給」は、「V 給」(V + 授与動詞) の形でも使われる。注目すべきは、「V 給」は、本稿でいう B1 型の構文パターンに使用が制限されるという点である。さらに、前項動詞のクラスは、基本的に物の授与や移動を表す動詞であり、作成動詞や獲得動詞は生起しにくい (または、揺れがある) ことから (朱 1979, 1980, 1981, Liu 2006, 杉村 2007, 佐々木 2009, 井上 2011), 「V 給」の基本的な使用範囲は B1 α 型であることがわかる。佐々木 (2009: 212) は、「V 給」の V が (104) のような物の移動を表す動詞に制限されることなどから、「V 給」の「給」は、依然として具体的な物の授与の意味を色濃く留めており、(105) のような事例 (本稿でいう B1 β 型) が適格となる「てやる」に比べ、文法化が進んでいないとする²⁴。

- (103) 我 给 他 一本书。
私 与える 彼 一冊 本
「私は彼に一冊の本をやった」 (A 型)
- (104) a. 送给 他 一件 毛衣。
贈る-与える 彼 一枚 セーター

²⁴ 以下、先行研究として挙げる中国語の例文の幾つかについては、筆者が新たにグロスと日本語訳を加えている。

- 「彼にセーターを一枚プレゼントしてやった」 (B1 α 型) (朱 1981: 171)
- b. 我 卖给 他 一本书。
私 売る-与える 彼 一册 本
「私は彼に本を売ってやった」 (B1 α 型) (佐々木 2009: 208)
- c. 花子 寄给 我 一个 包裹。
花子 郵送する-与える 私 一つ 小包
「花子が私に小包を送ってくれた」 (B1 α 型) (井上 2011: 39)
- (105) a. *我 买给 他 一本书。
私 買う-与える 彼 一册 本
「私は彼に本を買ってやった」 (B1 β 型) (朱 1980: 156)
- b. *织给 他 一件 毛衣。
編む-与える 彼 一枚 セーター
「彼にセーターを一枚編んでやった」 (B1 β 型) (朱 1981: 171)
- c. *他 刻给 我 一个 印章。
彼 彫る-与える 私 一つ 印鑑
「彼は私に印鑑を彫ってくれた」 (B1 β 型) (井上 2011: 42)
- d. *我 念给 他 一本书。
私 読む-与える 彼 一册 本
「私は彼に本を読んでやった」 (B1 β 型) (佐々木 2009: 209)

(104)と(105)の相違は、日本語授与動詞構文を基に設定したB1 α 型とB1 β 型の区分が、対照言語学的にも一般性を有する重要な区分であることを示している²⁵。

(105)のような作成動詞や獲得動詞を使って物の授与を表す場合、通例、以下のa文のように、受け手(「給NP」(NPに))を文末に表示する文型(=V NP 給NP)か、b文のように、受け手(「給NP」(NPに))を動詞句の前に表示する文型(=給NP V NP)が使われる(ここでの「給」は受領者マーカーを示す。グロスの

²⁵ 朱(1980)によれば、同じ「写」(書く)でも、「封信」(手紙)を目的語に取る「写」は、受け手への物の移動を含む3項動詞(所有変化動詞)であるため、「V給」が成立し、「春联」(春聯(しゅんれん):正月に門や戸口に貼るめでたい対句)を目的語に取る「写」は、受け手への物の移動を含まない2項動詞(作成動詞)であるため、「V給」は成立しないとされる。

- (i) a. 我 写给 他 好几 封信。
私 書く-与える 彼 たくさん 手紙
「私は彼に手紙を何通も書いてやった」 (B1 α 型)
- b. *我 写给 他 一副 春联。
私 書く-与える 彼 一揃い 春聯
「私は彼に春聯を書いてやった」 (B1 β 型) (朱 1980: 161-162)

ただし、筆者がおこなった3名の中国語母語話者のインフォーマントによる容認度調査では、3名いずれも、(i-a)と同様、(i-b)の例を完全に適格と判断している(注26参照)。この結果は、中国語において、「V給」の使用が一部B1 β 型にまで及びつつある実態を示している。

PERF は完了相)。中国語の授与構文(間接目的語=物の受け手)には、もう1つ、「給」なしの二重目的語構文の文型(= V NP NP)もあるが、作成動詞や獲得動詞は、この文型では使えない(Liu 2006: 889)。

- (106) a. 织 一件 毛衣 给他。
編む 一枚 セーター に 彼
b. 给他 织了 一件 毛衣。
に 彼 編む-PERF 一枚 セーター
「彼にセーターを一枚編んでやった」 (cf. 105b) (朱 1981: 170-171)

一方で、井上(2011: 45)で指摘されているように、実際には、(105)のような「獲得動詞/作成動詞+給」の事例については、その可否をめぐって母語話者による判断に揺れがみられる。そこには方言差も関係するようであるが(杉村 2007: 86)、井上(2011: 45)は、中国中央テレビ(北京)のドラマの中で使われた「买給」(買ってやる)の事例(方言的な表現ではない)を報告している。また、邵(2009)は、北京大学 CCL コーパスなどの調査をもとに、以下のような「獲得動詞/作成動詞+給」(「买(買う)+給」,「抄(書き写す)+給」など)の事例を報告している。

- (107) 书上说 法国男人 可以 不 吃饭 也
本によると フランスの男 できる ない ご飯を食べる も
要 用 最后一元钱 买给 情人 一枝花。
能願動詞:強い意志 使う 最後の一銭 買う-与える 恋人 一輪の花
(《青年文摘・人物版》2003年)

「(ある)本によると、フランスの男はご飯を食べなくても、最後の一銭をはたいて恋人に一輪の花を買ってあげることができる(らしい)」

- (108) 为 此 费了 许多时候, 抄给 我 数十页
ため これ 費やす たくさんの時間 書き写す-与える 私 数十ページ
有关柳氏祖先 最可靠的材料。
柳氏祖先に関する 最も信頼できる材料 (《读书》)
「このため、たくさんの時間を費やして、柳氏の祖先に関する最も信頼できる資料を数十ページも私に書き写してくれた」
(以上、邵 2009: 3) (用例は、北京大学 CCL コーパスから)

邵(2009)は、「V 給」の V の範囲が以前よりも広がってきており、V が物の授与・移動を表す動詞に制限されるとした朱(1979)の一般化の反例となる事例が、近年、標準語においても見られるようになってきているとする。

筆者がおこなった3名の中国語母語話者に対するインフォーマント調査でも、(105a)の「买给」(「(本を)買ってやる」)の例は自然、または、それほど不自然でないと判断されたが、興味深いことに、(105d)の「念给」(「(本を)読んでやる」)

の例は、(105a)の「买给」より容認度が低いと判断された²⁶。これには、(105a)の目的語「书」(本)は授与の対象物であるが、(105d)の目的語「书」(本)は授与の対象物ではないという違いが関係すると考えられる。実際、次の例は、目的語「诗」(詩)が授与の対象物であるため、許容度は相対的に(105d)に比べ高い。

- (109) ?|OK|? 我 念给 他 一首 诗。
私 読む-与える 彼 一首 詩
「私は彼に詩を読んでやった」

一方、次の「门」(戸)は授与の対象物ではないため、「V 给」は不適格となる。

- (110) *|*|* 我 开给了 他 门。
私 開ける-与える-PERF 彼 戸
「私は彼に戸を開けてやった」

「獲得動詞／作成動詞+给」は、実例として現れ始めており、また、その可否をめぐる母語話者による判断に揺れも生じている。「V 给」は文法化の途上にあり、近い将来、B1β型が安定的に確立する可能性があることが示唆される。

一方、「V 给」は、B2型やB3型としては使えない。B1β型の事例に揺れがあっても、「V 给」が物の授与を表す状況でのみ成立することには変わらないのである。

- (111) *我 昨天 替 小王 打工给了。
私 昨日 代わって 王さん アルバイトする-与える-PERF
「私は昨日王さんの代わりにアルバイトをしてやった」 (B2型)
cf. 我 昨天 替 小王 打了一天工。
私 昨日 かわって 王さん した 一日 アルバイト
「私は昨日王さんの代わりに一日アルバイトをした」 (井上 2011: 43)

- (112) a. *雨 下给了。
雨 降る-与える-PERF
「雨が降ってくれた」 (B3型)
b. *物价 下降给了。
物価 下がる-与える-PERF

²⁶ (105a) - (105d) と注 25 (i-b) に対する 3 名の中国語母語話者のインフォーマントによる容認度の判断を A|B|C で示す (容認度判定は [OK, (?), ?, ??, *] の 5 段階評価による)。

- (i) OK|(?|)(?) 我买给他一本书。(私は彼に本を買ってやった) (= 105a)
(ii) OK|?|? 织给他一件毛衣。(彼にセーターを編んでやった) (= 105b)
(iii) (?|?)|?(?) 他刻给我一个印章。(彼は私に印鑑を彫ってくれた) (= 105c)
(iv) ?|?|* 我念给他一本书。(私は彼に本を読んでやった) (= 105d)
(v) OK|OK|OK 我写给他一副春联。(私は彼に春聯を書いてやった) (= 注 25 の (i-b))

本稿で B1β型と呼ぶこれらの例は、従来、不適格とされてきた例である。母語話者によって容認度の判断が異なる例もあるが、今回の調査で、容認度がかなり高い例があることが明らかになった。なお、(i) と (iv) で容認度に差がある点に注目されたい。

「物価が下がってくれた」

(B3 型)

(劉轟 p.c.)

3.4. 言語間での授与動詞構文の範囲の差と含意階層

日本語, 韓国語, マラーティー語, 中国語の授与動詞の構文パターンの範囲は, 次のように整理される (√, * は, それぞれ, 当該の構文型の有り, 無しを示す。? は, 中国語では B1β 型, 韓国語では B3 型が安定的に確立していないことを示す)。

表3 言語毎の構文パターンの範囲

	中国語	マラーティー語	日本語	韓国語	日本語
	給	<i>deNe</i>	やる	<i>cwuta</i>	くれる
A 型	√	√	√	√	√
B1α 型	√	√	√	√	√
B1β 型	?	√	√	√	√
B2 型	*	*	√	√	√
B3 型	*	*	*	?	√

この表から, 授与動詞を「V + 授与動詞」の形で使う言語における授与動詞の構文パターンの範囲に関して, 次のような通言語的な含意階層が提示できる²⁷。

(113) 授与動詞の構文パターンの含意階層:

A 型 < B1α 型 < B1β 型 < B2 型 < B3 型

この含意階層によれば, たとえば, B3 型の用法を持つ言語であれば, A 型, B1α 型, B1β 型, B2 型の用法も持ち, B2 型の用法を持つ言語であれば A 型, B1α 型, B1β 型の用法も持つことが予測される。逆に, たとえば, B2 型の用法を持たない言語は, B3 型の用法も持たないことが予測される。

上で提示した含意階層は, 授与動詞の文法化の度合いを反映した階層である点にも特色がある (文法化の度合い: 低 < 高)。表3の結果から, 日本語, 韓国語, マラーティー語, 中国語の授与動詞の文法化の度合いの差は次のように捉えられる²⁸。

(114) 各言語の「V + 授与動詞」における授与動詞の文法化の度合い (低 < 高):

給 (中) < *deNe* (マ) < やる (日) < *cwuta* (韓) < くれる (日)

²⁷ 厳密には, 表3からは, A 型 < B1α 型の階層関係は導出されないが, 他言語も視野に取めた場合, 「B1α 型を持てば A 型も持つ」という含意は成り立ち得るのに対して, 「A 型を持てば B1α 型も持つ」という含意は成り立ち得ないことが想定されるため, (113) では, A 型と B1α 型の間に階層差を設定している。

²⁸ 本稿では, 表3に示した各言語の授与動詞構文の分布差は, 各言語の授与動詞の文法化の進展差の反映として捉えたが, 一方で, その分布差には, 各言語の「V + 授与動詞」における V と授与動詞の複合形態 (ないしは, 接続形態) の違い (複合動詞か複雑述語か等) が影響を与えている可能性も考えられる (査読者からの指摘による)。今後の検討課題としたい。

本稿で対照した言語は、日本語、韓国語、マラーティー語、中国語の4言語に過ぎないが、授与動詞 (GIVE 動詞) を「V + 授与動詞」の形として使う言語は、アジア諸語、太平洋諸語、アフリカ諸語、アメリカインディアン諸語の中の言語に広く見られる (Creissels 2010: 53-57)。アジア諸語の中では、本稿で取り上げた言語以外に、カザフ語、ヒンディ語、モンゴル語、ネパール語などがある (山田 2004: 346-347)。今後、本稿の分析視点をもとに、これらの言語の授与動詞の構文パターンを精査することで、(113) の含意階層の妥当性を検証していく必要がある²⁹。

4. おわりに

本稿では、日本語の授与動詞構文が、本動詞型、補助動詞型合わせて、5つの構文パターンに分類できることを示すと共に、そこでの分類をもとに、韓国語、マラーティー語、中国語の授与動詞構文との対照研究を試みた。さらに、これらの言語との対照研究から得られるインプリケーションとして、授与動詞の構文パターンの範囲に関する通言語的な含意階層を提出した。本稿の主たる成果は、これまで着目されてこなかった構文パターンの類型化という視点によって、(i) 日本語の授与動詞構文の構造体系を明らかにした点、(ii) 授与動詞を「V + 授与動詞」の形で使う言語同士を、共通の枠組みのもとで比較対照し、言語間の相違を示した点、(iii) 授与動詞の構文パターンの範囲に関する含意階層の仮説を提出し、授与動詞構文の通言語的研究を行っていく上での1つの見通しを与えた点、の3点に集約される³⁰。

²⁹ Smith (2010) では、ライ語 (チベット = ビルマ語派の言語) の授与動詞 *peek* が文法化したと推定される *piak* について、以下のデータが提示されている (1: first person, 3: third person, BEN: benefactive, ERG: ergative, p: plural, s: singular) ((i) のグロス buy₂ における下付き数字の2は、自己交替する動詞語幹のうちの他動詞語幹を示すとされる) (Smith 2010: 86)。

(i) *tsewmaŋ tsa-ʔuk ka-tsook-piak*
Tsewmaŋ letter-cover 1s-buy₂-BEN
'I bought Tsewmaŋ a book.'

(ii) *tsewmaŋ door ka-kal-piak*
Tsewmaŋ market 1s-go-BEN
'I went to market for Tsewmaŋ.'

(iii) *paŋpaar niʔ ʔan-kan-paar-piak*
flowers ERG 3p-1p-bloom-BEN
'The flowers bloomed for us.'

(Smith 2010: 86)

とりわけ注目されるのが (iii) の例である。ライ語の *piak* 構文は、日本語の「てくれる」構文と同様に、非行為的事象に対しても使えることがわかる。Smith (2010) では、*piak* 構文は、(i) や (ii) のような動作主を含むタイプから、(iii) のような動作主を含まないタイプへと使用範囲を拡大させていったという示唆的な指摘がなされている。

Creissels (2010: 54) によれば、*piak* は接辞形式である。この点では、「V + 授与動詞」からなる受益構文とは異なる。「V + 受益接辞 (授与動詞由来)」の受益構文に対しても、「V + 授与動詞」の受益構文と同様の分析が可能であるかについては、今後検証していきたい。

³⁰ 授与動詞構文に関して設定した本稿の分類区分は、日本語の他の文法現象 (提示動詞「(て)みせる」、移送動詞「(て)よこす」など) を整理・記述する上でも有効な分類区分となり得る。たとえば、移送動詞構文 (「(て)よこす」) は、A型と B1α型に使用が限定される。同じく

世界の言語を見渡した場合、授与動詞 (GIVE 動詞) は、多様な機能語への文法化を見せる (Newman 1996: 233)。本稿で提示した構文パターンの類型化の枠組みは、授与動詞が「V + 授与動詞」の形で使われているケースを分析する場合には有効であるといえるが、授与動詞がそれ以外の形式——たとえば、中国語の授与動詞「給」などに見られる受益者マーカ―など——へと文法化しているケースを分析する場合には、少なくとも、そのままの形で適用することはできない点是指摘しておく必要がある。このように、本稿の枠組みがそのまま適用可能な授与動詞の現象や言語の範囲には限界もあるものの、授与動詞を「V + 授与動詞」の形で使う言語同士を比較対照する際の指針となる共通の枠組みを提示し、少なくとも本稿で取り上げた言語に対してはその枠組みが有効に機能し得ることを示した点は、本稿の重要な成果であるといえる。とりわけ「授与動詞の構文パターンの含意階層」は、言語間の授与動詞の構文パターンのヴァリエーションの差異を精緻に捉えることが可能であると同時に、当該言語において授与動詞が通時的にどのようなプロセスで拡張していくのかを理論的に予測することも可能である点で、対照言語学的・歴史言語学的に重要なインプリケーションを持つ。

また、本論で論じたように、韓国語では B3 型、中国語では B1 β 型に一部揺れが生じており、新たな構文型の創出に繋がる萌芽の兆候が共時的にも確認されるが、本稿の構文パターンの類型化の枠組みによれば、このような各言語の授与動詞構文に見られる共時的な文法の揺れに対しても自然な説明を与えることが可能である。

本稿で試みたような、言語の動態的な側面に注意を払いながら、明示的な構文パターンを手掛かりに言語間の相違を捉える対照研究の方法は、授与動詞構文以外の構文現象を記述する上でも有効な視点となる。

参 照 文 献

- 文化庁文化審議会国語分科会 (2007) 『敬語の指針 (答申)』東京：文化庁。
 Creissels, Denis (2010) Benefactive applicative periphrases: A typological approach. In: Fernodo Zúñiga and Seppo Kittilä (eds.) (2010), 29–69.
 Declerck, Renaat (1991) *A comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
 韓京娥 (2008) 「日本語の「～てあげる・くれる」と韓国語の「-아/어 주다 -a/e cwuta」の意味機能」『日本語教育』136: 78–87.
 池原悟・宮崎正弘・白井諭・横尾昭男・中岩浩巳・小倉健太郎・大山芳史・林良彦 (編) (1999) 『日本語語彙体系 (CD-ROM 版)』東京：岩波書店。
 井上優 (2011) 「日本語・韓国語・中国語の「動詞 + 授受動詞」」『日本語学』30(11) (9月号): 38–48。
 加賀信広 (1997) 「日英語の受益構文と意味役割」筑波大学現代言語学研究会 (編) 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』209–248。東京：三修社。

物の移動を表す直示的 3 項述語でも、授与動詞と移送動詞は構文パターンの範囲や文法化の度合いにおいて興味深い相違が認められるのである。

また、詳しくは別稿に譲るが、構文パターンの類型化に基づく本稿の分析手法は、日本語の「もらう (てもらう)」構文 (さらには、「(て) ほしい」構文) の分析にも応用可能であり、また、日本語の「もらう」構文と韓国語の *patta* (받다) 構文などとの文法化に基づく対照研究をおこなう上でも有益な視点となる。

- 木村英樹 (2012) 『中国語文法の意味とかたち』 東京：白帝社。
- 金田一春彦 (1976) 「国語動詞の一分類」金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』 7-26. 東京：むぎ書房。
- Kishimoto, Hideki (2001) The role of lexical meanings in argument encoding: Double object verbs in Japanese. 『言語研究』 120: 35-65.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English verb*. Third edition. London: Longman.
- Liu, Feng-his (2006) Dative constructions in Chinese. *Language and Linguistics* 7: 863-904.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 東京：くろしお出版。
- 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』 東京：くろしお出版。
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の受益構文について」 『国語学』 186: 1-14.
- Murphy, Raymond (2000) *Grammar in use: Intermediate*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Newman, John (1996) *Give: A cognitive linguistic study*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Pardeshi, Prashant (1998) A contrastive study of benefactive constructions in Japanese and Marathi. 『世界の日本語教育』 8: 141-165.
- 佐々木勲人 (2009) 「授与動詞を含む複合動詞の文法化—“V 給” と “V テヤル” の対照から—」 張威・山岡政紀 (編) 『日語動詞及相关研究』 207-214. 北京：外語教学与出版社。
- 澤田治美 (2011) 「モダリティにおける主観性と仮想性」 澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座 5—主観性と主体性—』 25-48. 東京：ひつじ書房。
- 澤田淳 (2005) 「日本語の受益構文と「主体化」—「～てくれる」構文と「～てやる」構文の比較—」 『日本認知言語学会論文集』 5: 441-450.
- 澤田淳 (2007) 「日本語の受益構文の格表示と物の授与性」 『言語科学論集』 13: 71-83.
- 邵敬敏 (2009) 「从“V 给”句式的类推看语义的决定性原则」 『语言教学与研究』 6: 1-8.
- Shibatani, Masayoshi (1994) Benefactive constructions: A Japanese-Korean comparative perspective. In: Noriko Akatsuka (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* 4: 39-74. Stanford: CSLI Publications.
- Shibatani, Masayoshi (1996) Applicatives and benefactives: A cognitive account. In: Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson (eds.) *Grammatical constructions: Their form and meaning*, 157-194. Oxford: Oxford University Press.
- Shibatani, Masayoshi (2000) Japanese benefactive constructions: Their cognitive bases and autonomy. In: Kenichi Takami, Akio Kamio and John Whitman (eds.) *Syntactic and functional explorations: In honor of Susumu Kuno*, 185-205. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In: R.M.W. Dixon (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies and New Jersey: Humanities Press.
- Smith, Tomoko Yamashita (2010) Cross-linguistic categorization of benefactives by event structure: A preliminary framework for benefactive typology. In: Fernodo Zúñiga and Seppo Kittilä (eds.) (2010), 71-95.
- Song, Jae Jung (2010) Korean benefactive particles and their meaning. In: Fernodo Zúñiga and Seppo Kittilä (eds.) (2010), 393-418.
- 杉村博文 (2007) 「中国語授与構文のシンタクス」 『大阪外国語大学論集』 35: 65-96.
- Swan, Michael (1980/1995) *Practical English usage*. First/second edition. Oxford: Oxford University Press.
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』 東京：研究社。
- Thomson, A. J. and A. V. Martinet (1986) *A practical English grammar*. Fourth edition. Oxford: Oxford University Press.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 東京：くろしお出版。
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ』 東京：明治書院。
- You, Seok-Hoon (1997) Argument structure changes in the Korean benefactive construction. In: Ho-min Sohn and John Haig (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 6: 455-472. Stanford: CSLI Publications.
- 朱德熙 (1979) 「与动词“给”相关的句法问题」 『方言』 第2期: 81-87.
- 朱德熙 (1980) 『现代汉语语法研究』 商务印书馆。(朱德熙 (著)・村松文芳・杉村博文 (訳) (1988) 『現代中国語文法研究』 東京：白帝社。)

朱德熙 (1981) 『语法讲义』 商务印书馆。(朱德熙 (著)·杉村博文·木村英樹 (訳) (1995) 『文法講義』 東京: 白帝社.)
 Zúñiga, Fernando and Seppo Kittilä (eds.) (2010) *Benefactives and malefactives*. Amsterdam: John Benjamins.

執筆者連絡先:

〒 150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25
 青山学院大学文学部
 juns0807@cl.aoyama.ac.jp

[受領日 2013 年 3 月 7 日

最終原稿受理日 2014 年 2 月 8 日]

Abstract

**Constructional Patterns of Japanese Benefactive Constructions:
 A Cross-Linguistic Perspective**

JUN SAWADA

Aoyama Gakuin University

This paper argues that Japanese benefactive constructions with (*-te*) *kureru/yaru* have the five synchronic variants shown in (1):

- | | | | |
|-----|--------------------|--|--------|
| (1) | Type A: | X-ga Y-ni Z-o kureru/yaru | (MV) |
| | Type B1 α : | [X-ga Y-ni _i [Y-ni _i Z-o V] te-kureru/te-yaru] | (AuxV) |
| | Type B1 β : | [X-ga Y-ni [Z-o V] te-kureru/te-yaru] | (AuxV) |
| | Type B2: | [X-ga [...V] te-kureru/te-yaru] | (AuxV) |
| | Type B3: | [[(X ga) ...V] te-kureru/*te-yaru] | (AuxV) |

These variants can be explained as products of a grammaticalization process (Type A→Type B1 α →Type B1 β →Type B2→Type B3) based on four semantic/syntactic criteria. This model in (1) can also be applied to the analysis of the benefactive constructions with GIVE verbs in languages like Korean (*cwuta*), Chinese (*gěi*), and Marathi (*deNe*). I propose the following implicational hierarchy to predict the occurrence of possible benefactive construction types in a given language:

- (2) Type A < Type B1 α < Type B1 β < Type B2 < Type B3